

三重大学アカデミックプラザの歴史†

ー全学的教育改革の一側面ー

中川 正*

三重大学人文学部*

全学的な大学教育改革事例として、PBL 全学展開を推進した三重大学を、学習成果の公開を推進してきたアカデミックプラザという側面から分析した。アカデミックプラザは、2003年に人文学部で生まれた法則研究プラザを前身とし、2006年以降高等教育創造開発センターを拠点として運営されてきた。多様な分野の学生や教職員が市民を意識した発表を推進する活動を通して、PBLや学習成果発表の活性化を導くとともに、補助金事業をも契機として、教育プログラムと学生組織を結びつけたアカデミックコミュニティとしての整備が進んだ。学部で芽生えていた教育改善の内発的活力が結集される契機となり、制度的な変革が進む一助となった。大学に内在するエネルギーを発見し、それを集約してプロジェクトに具現化する重要性が明らかになった。

キーワード：大学教育改革、アカデミックプラザ、アカデミックフェア、法則研究プラザ、PBL、学習成果公開

1. はじめに

時代の要求に対応した大学教育を推進するうえで、大学や学部を新設することを通して成果をあげている事例が報告されてきた(中嶋 2010, 中嶋 2012, 日向野 2013)。その一方で、大多数の大学においては、既存の枠組みの中で、どのように教育改善を進めていくかが課題となっている。大学教育改革を制度的に進めていくうえで、学長のリーダーシップの重要性が唱えられてきた(教育再生実行会議 2013, 中央教育審議会大学分科会 2014)。しかし、学長や教育担当副学長が旗を振っても、現場の教員の力が得られなければ、中身を伴った改革は困難である。リーダーシップと現場の相互作用のあり方に関して、実態に即した検討が必要となる。

三重大学は、5 学部からなる地方国立大学であり、独立行政法人化前には、共通教育の出動以外、学部間の教育連携は稀な状況であった。しかし、豊田長康学長(在任期間 2004～2008 年度)によって打ち出された PBL(Problem-based Learning)の全学的推進方針は内田淳正学長(2009～2014 年度)にも引き継がれて、全学的な改革が進められた。その結果、2011～2015 年度においては、学士課程の 13%前後の授業が、電子シラバスにおいて“PBL”であると申告するまでとなっている。

この改革には、高等教育創造開発センター(Higher Education Development Center:略称 HEDC)¹⁾が推進役となり、国内外の先進事例調査、FD の開催、PBL 授業開発

の支援、PBL マニュアルの作成、Moodle の整備、PBL 用評価法開発などをすすめ、共通教育を中心的舞台として実施されたことが紹介されてきた(奥村 2007, 高山 2007, 中山ほか 2010, 中島ほか 2011, 中川 2015)。一方で、その中に「アカデミックプラザ」と称されるアカデミックコミュニティ構想が関与してきたことはあまり知られていない。

アカデミックプラザは、2006 年度に HEDC 教育連携部門に生み出されたものであり、カフェと呼ばれる公開知的交流会や、年に一度のアカデミックフェアと呼ばれる PBL を中心とする学習成果発表会を行うことを主な活動としてきた。その前身は、2003 年に人文学部で生み出された法則研究プラザであり、法則カフェや法則フェスタがその活動内容であった。医学や工学など理科系分野で発展してきた PBL が、三重大学においては、人文社会科学系をも巻き込んだ大きなうねりとなった背景に、人文学部発の社会公開型教育の動きがあったことを忘れてはならない。

本稿は、法則研究プラザからアカデミックプラザへと受け継がれた学習成果公開ムーブメントと、それに付随する三重大学の教育改善プロセスを歴史的にふりかえることを通して、多様な分野からなる総合大学が実体を伴う改革を推進する鍵を探ることを目的とする。

筆者は、法則研究プラザやアカデミックプラザの設立や運営にかかわり、2003～2005 年度においては、『法則研究プラザ活動報告書』、2006 年度～2011 年度においては、『ア

カデミックプラザ活動報告書』を編集した²⁾。本稿では、これらの報告書を主たる資料とするが、主催者の一員としての意図や評価をも加えて分析を行う。

2. 法則研究プラザ期(第1期:2003~2005年度)

2.1. 発足の経緯

アカデミックプラザの前身である法則研究プラザの活動は、人文学部の教員たちがすでに成果をあげてきた教育実践を連携する形で始まった。2003年2月、人文学部の教員数名は教育プロジェクトとして、「研究プラザ制度を用いたネットワーク型教育・研究の推進」をまとめ、三重大学重点領域研究申請の学部内選考に採択された。3月には、その推進を進めるための有志による法則研究プラザが発足した。プロジェクト自体は、全学において不採択となったが、法則研究プラザは、人文学部からの支援を受けつつ、他学部教員や市民をも加えて活動を活性化させた。同年10月には人文学部20周年記念行事として、シンポジウム「市民感覚と密着した開放型研究・教育—日常的興味と学問研究の回路をつなぐ—」が開催され、100名の参加者を得た。2004年2月11日には第1回法則フェスタが人文学部視聴覚室で開催され、150名の参加者を集め、学生、市民、教員による21件の発表が行われた。その模様は、三重テレビや中日新聞、朝日新聞、毎日新聞等で紹介され、社会的な認知を得、活動が軌道に乗った。

2.2. 理念

法則研究プラザは、あらゆる立場の人々が、「法則」という用語を用いて、研究交流を行う場である。「プラザ」という用語は、三重大学を一つの「学問の町」として捉えたアナロジーである(図1)。この町には役場(行政学)、裁判所(法学)、市場(経済学)、学校(教育学)、病院(医学)、工場(工学)、農場(農学)など、多様な施設で働く人々が、専門的な業務を行いつつ、市民にサービスを提供している。この多様な専門からなる人々が交流を行うのが広場(プラザ)である。この広場では、人々は同じ立場で交流をすることができる。多様な人々が、互いに理解できる言葉を用いて、対等な立場で交流することができるプラザを設置することが、総合大学としての三重大学の持ち味を最大限に発揮するうえで有益であると考えた。

法則研究プラザは、研究発表を行ううえで、そのタイトルを、原則として「〇〇の法則」とする約束を加えたことに特徴を持つ。「法則」という用語を用いることにより、専門的な研究を親しみやすいものにするのと同時に、日常的現象を学問と結びつけることを容易にすることを

意図したものである。

「法則」という用語を活用する有効性は、プラザ発起人であった筆者が1997年度より実践を続けてきた法則探究型授業によって確認してきたものである(中川2000)。人文学部開講「文化環境論」では、学生に日常生活の中から法則性を発見し、その要因・意味を説明・解釈し、応用することを通して、身近な関心を多様な学問と結びつける手法を学習させてきた。法則研究プラザは、学生が授業等で考察した法則をさらに深化させるために、多様な分野の教員や学生たちも関わって議論を行う舞台設定という意味合いもあった。

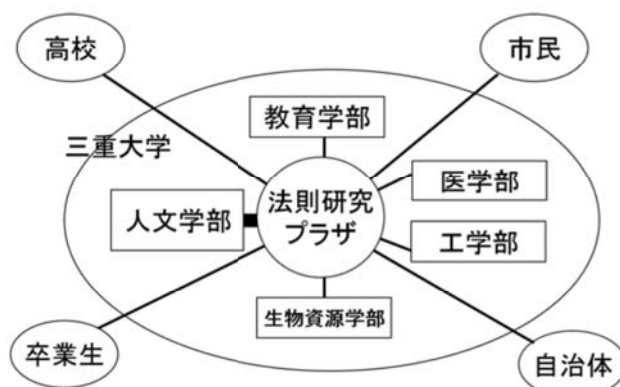


図1 法則研究プラザのイメージ(2003年)

このように、法則研究プラザは、単に研究発表会の場を提供するにとどまらず、市民を巻き込んだ研究・教育の推進、異なったレベルの異なった分野の研究交流、および「法則」という用語を用いることによる「発見」、「説明・解釈」、「応用」という思考の流れを生み出す教育ムーブメントなど、多様な意図を内包していた。そのために、運営にかかわった教員間では、活動の焦点が教育なのか研究なのか、重視する点が学問に対する親しみやすさなのか発表のレベルの維持なのか、交流を活性化させるターゲットが学内の多様な学問分野間なのか、大学と市民間なのかについて、意見が戦わされた。法則研究プラザが多様な側面を有していたことが、多面的な影響を波及させることにつながったものと思われる。

2.3. 活動内容

法則研究プラザは、法則カフェと法則フェスタを主な活動とした。

法則カフェは、昼休みや放課後を中心に開催される研究発表会である。2004年度には2回、2005年度には8回、2006年度には11回開催と、発足3年でほぼ月例化した。2005年度を例にとると、2回は人文学部教員によ

るものであり、ジェンダーや公害に関する発表、3回は学生による日常的な法則の発表、1回は人文学部学生による卒論内容の発表、1回は大学院生による地域連携授業の成果報告であった。

法則フェスタは、アカデミックフェアに移行するまで、3回開催された。第2回(2005年2月)には、参加者150名を得て、21件の発表が、第3回(2006年2月)には、参加者126名を得て、42件の発表が行われた。

第2回法則フェスタには教育学部が、第3回には医学部看護学科の教員たちも企画に参加し、発表分野が多様化した。たとえば、第3回法則フェスタでは、午前中に、心理学、環境研究、歴史学、地理学、看護学、ヨーロッパ研究、文学、社会学等の分科会が開催され、午後にはその分科会で発表された中から一つずつ代表が発表し、投票で法則大賞を決定するという開催方法が取られた。複数回答のアンケート結果(有効回答数79)によると、フェスタの魅力としては、「テーマの多様性」を挙げた人が64.5%と最も多く、「社会への開放性」(36.7%)、「楽しそうな点」(34.1%)と続いた。地元新聞や放送局からも、多様なテーマでの発表や議論を楽しむ市民参加型行事として報道され、三重大学の特色あるイベントとして一定の社会的な評価を得た。

2.4. 全学教育への影響

第一期中期目標・中期計画期間の初年度となる2004年度に、全学教育のPBL化に向けた動きが始まり、その一環として、共通教育において、週2回のPBLセミナー開講案が検討された。医学部が中心となって実施されてきたPBLを人文・社会系教育においても実践可能であると判断する一つの材料となったのは、法則研究プラザの存在であった。当時共通教育教養教育部門長であった高山進氏は、「人文学部を中心に『法則研究プラザ』という形で学生の内在的な知的欲求を引き出す教育実践が進行し、成果が現れてきていた。共通教育において導入可能な方式であることが予想された。」と振り返っている(高山2007, p. 28)。

PBLセミナーに開講に向けて、高山委員長のもと議論が行われた統合教育部門委員会には、法則研究プラザにかかわる人文学部、教育学部の教員も委員として参加しており、学習成果の公開による教育の質向上の効果に関しても議論に上った。その結果、セミナー開講要件として「学生による学習成果をセミナーの終盤に1回「公開の場」で発表する」が加えられた³⁾。

法則研究プラザの成果の一つとして、2005年度文部科学省「特色ある大学教育プログラム」の三重大学からの

申請として「法則探究を契機とした能動的学習の展開—社会発信型PBL教育の実践—」が採用されたことが挙げられる。「法則の探究」を学生と教員の間で共有される基本理念として位置づけた、ワークショップ型・対話型の教育を通して、三重大学の教育目標を達成する取組であり、人文・社会科学分野も含めた独自の教育方法に発展させることを意図していること、および、学習の成果を社会に対して発信することを通して、学生の意欲を高め、コミュニケーション能力を育成するという特徴を主張したものであった(図2)。最終選考で不採択とはなったが、三重大学でのPBL化を象徴する一事例として位置づけられたことには意義があり、また不採択の理由として指摘された「弱い組織性」の強化に向けて、学内GPとして全学的に強化する姿勢が示されるようになった。

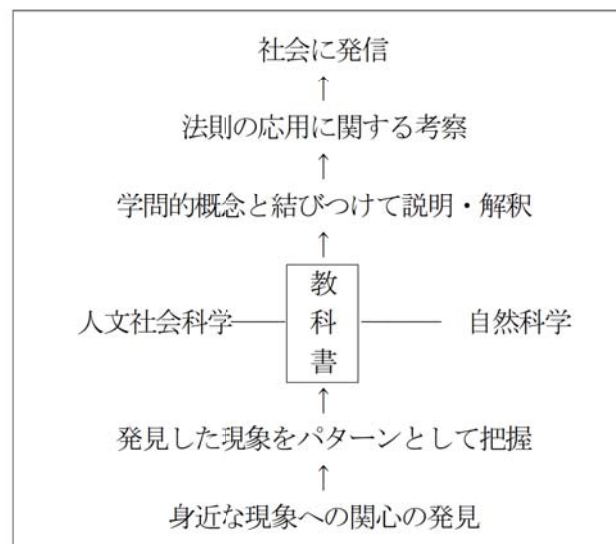


図2 法則探究を契機とした能動的学習のプロセス

(2005年度「特色ある大学教育支援プログラム」申請書より作成)

2005年度三重大学GPの成果の一つは、2006年度共通教育統合教育に、主題を横断する「法則の探究」授業群設置を計画したことであった。学問間の壁を取り去り、法則という言葉キーワードとして、法則研究の全体を把握する「法則探検入門」と「総合科目法則探検」、法則探究のための学問的思考を教える授業としての発見型科目(2科目)、説明・解釈型科目(3科目)、応用型科目(2科目)、それらを実践するPBLセミナー(7科目)が設定され、実質的な連携が行わるようになった。その成果として、2006年度末に法則研究プラザ編『法則探検に出かけよう』が出版された(法則研究プラザ編2007)。

このように、法則研究プラザは、人文学部の内発的な教育研究公開ムーブメントとして発展し、その成果の一

部が PBL セミナーの創設をはじめとする全学 PBL 化の要素に取り入れられ、三重大学における教育改革を外部にアピールするための公的な評価の材料のひとつとされた。その一方で、制度的な裏付けのない実態が指摘され、その状態を脱却するための工夫が模索された。

3. 全学教育連携期(第2期:2006~2008 年度)

3.1. アカデミックプラザの発足

2006 年度に、三重大学教育 GP として「社会公開型教育・研究成果報告集会を用いた大学の活性化」が採択され、三重大学アカデミックカフェ推進プロジェクトチームが、法則研究プラザ、HEDC、共通教育センター教養教育部門など、部局横断的に組織された。法則研究プラザの社会公開と平等性の原則を維持しつつ、「法則」という用語に限定されることがない、より広い意味での学問の町の広場(アカデミックプラザ)を三重大学に生み出そうとする意図によって生み出されたものである。多様な発表会(カフェ)をネットワーク化し、年に一度の学問の祭典として「三重大学アカデミックフェア」を開催することを活動内容とし、その組織的運営機関として HEDC 教育連携部門が位置付けられた⁴⁾。

2006 年 12 月の全学教務委員会では、高等教育創造開発センター長である山田康彦教育担当理事より、三重大学で行われている多様な教育・研究成果を、「アカデミックカフェ」(略称カフェ)として、市民公開を推進すること、および、学生、院生、教員、市民による教育・研究・社会活動成果の中で公開可能なものをカフェとしての開催協力を願う旨の依頼が行われ、全学に周知が図られた。その中で、第 1 回三重大学アカデミックフェアが 2007 年 2 月 17 日に開催されることが案内された。

3.2. 多彩なアカデミックカフェ

2006 年度には、多様なアカデミックカフェが開催された。まず、全学 FD として、HEDC 主催の大学教育カフェが 4 回開催された。医学研究科教員による「ポートフォリオを用いた学習成果の評価方法と医学部での実践事例」、教育学部教員による「授業交流カード大福帳の教育効果」や「学習効果の振り返りと継承を促進するウェブポートフォリオ」、生物資源学部教員による「理解できる楽しさを実感してもらおう講義法」が実施された。また、PBL カフェとして、人文学部「アメリカ研究の会」や授業での学習成果報告、大学院授業の成果報告が行われた。

法則カフェも、11 回開催された。発表者としては、学生のみによるもの(6 回)ばかりではなく、教員によるもの

(4 回)、学生と教員が共同して行うもの(1 回)があった。内容としては、PBL 授業の成果報告(5 回)が最も多かったが、専門研究の成果報告も 2 回あり、さらに、まちづくり、就職、留学生による異文化紹介など、多様性が高まった。その中でも、言語学コロキウムとの共催として開催された、ゲスト教員による早期英語教育実践の弊害について言語学的研究報告には、発達心理学者、教育学者、現場で英語教育を実践している人々などから異なった角度からの意見が出され、活発な議論の場となった。

3.3. アカデミックフェア

第 1 回アカデミックフェアは、2007 年 2 月 17 日に開催された。午前中に 6 つのアカデミックカフェ、午後にその代表からなる第 4 回法則フェスタを行うという形式を採用した⁵⁾。

前年度までの法則フェスタから、全学的な祭典としてのさらなる広がり求めて、教育学部 FD 委員会が 1 月に行ったポスターセッション『教育学部大学院生・学部生・教員と現場の協働』に参加依頼をした。ポスターセッションには、教育実践総合センターも加わり、10:30~12:00 アカデミックカフェ、12:00~13:30 ポスターセッション、13:30~16:30 法則フェスタというプログラムが完成した。

当日、約 120 名の参加者が集い、ZTV、中日新聞、伊勢新聞からも取材があった。午前のカフェでも活発な意見交換がなされ、ポスターセッションは、インタラクティブなプレゼンテーションがなされた。午後の法則フェスタに関しては、昨年度よりも幾分静かな催し物となったが、8 つの報告とディスカッションが行われた。

アカデミックフェアのアンケートで、テーマの多様性、楽しそうな点、学際性、社会への開放性に関しては、かなり肯定的な評価があった。ただ、第 1 回~第 3 回法則フェスタに比べると評価は低下した。前回までの法則フェスタの参加者からは、「テーマの"発見"そのものは身近なところから、でも解析(調査分析)の結果、思わぬ真実、新しい発見があった、というおもしろさを感じられるものが少なくなった。」「一昨年、昨年と比べると、楽しそうな雰囲気が少し薄まったように思います。中・高生が参加できるような雰囲気作りを。教育関係の法則も発表されていましたので、『市民、学生、研究者がともに楽しむ』という設定はすばらしいと思いますが、実現できていません。フェア・フェスタは祭りなのでから・・・」などがあった。法則フェスタにおいては、「法則」という用語を共通項とし、市民目線での公開が意識されていたが、アカデミックフェアでは、その縛りをはずしたため

に、「市民寄り」から「大学寄り」に軸足が移っていった。

有志による自主的なイベントが、大学の教育制度に組み込まれるときに、初期の生き生きとした雰囲気は幾分失われるが、イベント自体の学内での認知度は向上し、事務組織をも含めて運営体制が安定化したものと思われる。

3.4. 全学教育への影響

アカデミックプラザ発展期においては、三重大学に PBL 化が進展した時期と重なる。共通教育では PBL セミナーが定着し、統合教育における授業群の設置を通じた教員間の教育連携が進んだ。学部においても、PBL 授業が増加し、教育学部では、教員養成 PBL が進展した。その土台として HEDC 教育開発部門における PBL マニュアルの整備、評価部門における評価手法の開発、教育情報システム部門における Moodle の開発と普及などがあった。その中で、教育連携部門として位置づけられたアカデミックプラザは、PBL 教育に発表の機会を積極的に提供するとともに、アカデミックカフェやアカデミックカフェを通して、学部間の垣根を超えた多様な教育交流の進展に貢献したと思われる。

2008 年度に、三重大学は文部科学省「質の高い教育推進プログラム」に、「共感形成型 PBL 教育の全学的推進ー市民社会に生きる自立した学生の養成ー」の申請を行った。上記の教育成果を土台として、PBL 型グループワーク、Moodle を用いたグループ対話、肯定的学生評価、授業成果公开发表、自主学習コミュニティの創造を柱とするものであった。本取組の趣旨や PBL 開発、成果公開システム等の実績については高い評価を受けたが、事業の中心となる PBL が共通教育以外において浸透が遅いと判断されたこと、および取組の評価システムの具体性が不十分であると判断されたことにより、不採択となった。アカデミックプラザが提供する PBL 授業成果の公開の場を、学部における専門教育の発表の場として、さらに活用を推進することが課題となった。

4. 教育制度への統合期(第3期:2009~2011 年度)

4.1. PBL 履修の体系化

第一期中期目標・中期計画期間の最終年度となる 2009 年度には、野村由司彦教育担当理事のリーダーシップのもとで、共通教育を中心に PBL 教育の体系的履修の仕組みが整備された。一つは、統一プログラムによる全学クラス指定科目である「4 つのカスタートアップセミナー」の開始、もう一つは、「キャリア・ピアサポーター資格教

育プログラム」の開始である。

「4 つのカスタートアップセミナー」授業案は、2008 年度において、HEDC 教員を中心として作成された(中山ほか 2010)。三重大学が第一期中期目標・中期計画期間に築き上げてきた PBL 教育手法、教育評価手法、Moodle を活用した教育情報システムなどの成果を授業に集約してプログラム案が作成された。また、PBL セミナーやアカデミックプラザを通して確認されてきた公开发表の学習効果を適用すべく、授業の最後には、プロジェクトの発表会が組み込まれた。2010 年度においては、8 月 3 日に 4 つのカスタートアップセミナー発表会を開催した⁶⁾。

2006 年度より開始されたキャリア教育は、2008 年度には 15 科目開講、1,352 名の受講生にまで成長していた。2009 年度には、その系統的受講を促進すべく、「キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム」が開始された(中川 2015)。本プログラムは、所定のキャリア関連科目を履修する者に、学生支援の資質を認定するキャリア・ピアサポーター初級、または上級資格を与えるものである。初級資格を履修するためには、「4 つのカスタートアップセミナー」、「キャリアプランニング」および、「キャリア実践科目」と総称される諸科目の中から 1 科目の単位取得が必要となる(図 3)。

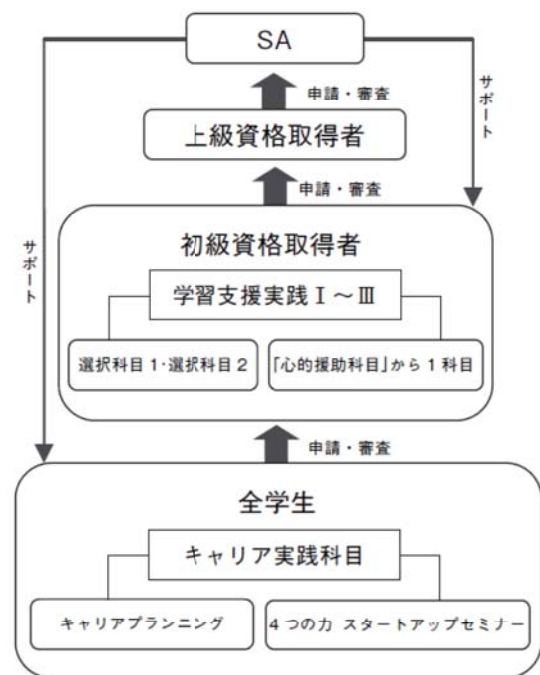


図3 キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム

「キャリア実践科目」には、学生の生活支援を行う「学生生活支援実践」、ピアサポートの実践を行う「ピアサポ

ート実践」,日本人と留学生との交流を進める「留学生支援実践」,障がいのある学生の支援を行う「障がい学生支援実践」,オープンキャンパスなどで三重大大学の紹介を行わせるための訓練をする「大学紹介実践」,広報誌を編集する「広報編集実践」,キャリアイベントの企画運営を行う「キャリアイベント実践」,環境 ISO 活動を行う「環境 ISO 実践」,三重大大学のブランドの開発を行う「三重大ブランドづくり実践」,男女共同参画を推進する「男女共同参画実践」,地域連携を行う「地域連携実践」などがある。

この3種類の科目を履修し,初級資格を取得した学生は,上級資格取得のために,さらに「学習支援実践」,「こころのサポート」および選択科目2科目の単位取得を目指すこととなる。「学習支援実践Ⅰ」は「4つのカスタートアップセミナー」のファシリテーション実習である。実習生は,30クラス前後開講されている「4つのカスタートアップセミナー」の1つに参加して,教員の補助をするとともに,ファシリテーターとしてのよりよい関与の在り方や学生の活動や学習を深化・促進するための工夫を提案する。そのために,受講生たちは,実習先の授業での活動後,水曜日の5コマ目に集まり,振り返りを行う。この授業を通して,「4つのカスタートアップセミナー」における新入生の適応補助に,上級生がかかわるのである。

上級資格は最短で2年次前期末に取得が可能となる。上級資格取得者は,SAとしての申請資格が得られるために,2年次後期から,授業補助に加わることができる。後期には「キャリア実践」諸科目が開講されるので,前年度の受講生が,同じ内容の授業のSAとして雇用されるなど,学生が学生をサポートしながら実践力を身につけることができる。さらに,3年生になると,「4つのカスタートアップセミナー」や「学習支援実践」のSAとしての活動が可能となる。このようにして,キャリア・ピアサポーター資格教育プログラムを通して,学修支援者養成のサイクルを生み出した。

4.2 就業力育成支援事業との連携

2010年度において,アカデミックプラザの活動は,HEDC,共通教育センター,学生総合支援センターの連携による運営に移行していった。

三重大大学は,2010年度文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」の採択を受け,「自他共に成長を目指す幅広い職業人の養成」の取組を開始した。本取組は,(1)自他共に成長を目指す社会性と,主体的に実践知を獲得する自立性を育成するキャリア教育の実施,(2)PBL(問題発

見解決型学習)を基盤とした初年次教育,共通教育,社会連携型専門教育の充実,(3)自立性と社会性を発揮させるアカデミックコミュニティとしての学内整備,(4)教員,職員,学生協働の学生支援と就職支援体制の構築を主軸としている。

学生の自立性と社会性を育成するために,「4つのカスタートアップセミナー」,キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム,専門教育の連携が必要となった。また,アカデミックフェアに,それらの異なった段階での学習成果をつなぐ公開発表の場としての役割が期待されるようになった(図4)。

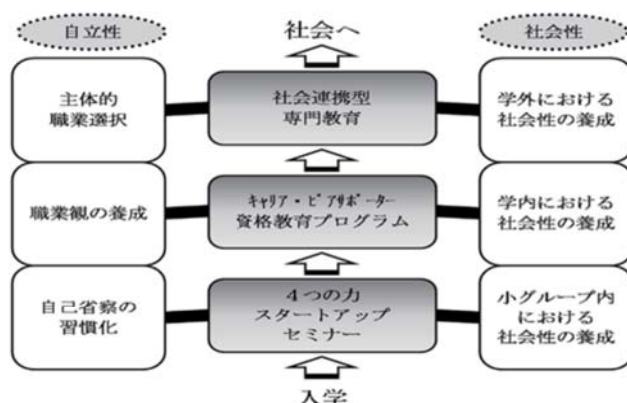


図4 就業力育成支援事業の概念図(2010年)

まず,「キャリア実践科目」では,各クラスの代表が,その学習成果をアカデミックフェアで発表することとされた。アカデミックフェア自体が,三重大大学の公的な行事であり,1年生を主体とする学生たちが,その働きに主体的にかかわりながら,社会性,リーダーシップ,協調性などを持った「生きる力」を発揮する舞台とすることが意図された。

2010年度当初には,12名のキャリア・ピアサポーター初級資格取得者が生まれており,彼らのうち7名が,上級資格を目指して「学習支援実践」を受講した。受講生は各々「4つのカスタートアップセミナー」のクラスの内1クラスのファシリテーション実習を行ったうえで,水曜日の9・10限に集まって振り返りを行うとともに,8月3日に開催されるクラス代表によるプロジェクトの合同発表会を企画した。

当日,共通教育3号館で,3会場に分かれて発表会が行われ,キャリア・ピアサポーターの運営によって,きめ細やかな発表会と交流会が実施された。この合同発表会は,大学のアカデミックなイベントの企画運営を担うことを通して,社会性の訓練となった。

4.3. ピアサポーター学生委員会の発足

就業力育成支援プログラムが意図する教員、職員、学生協働の学生支援と就職支援体制の構築を行ううえで、キャリア教育を通して訓練を受けた学生によるピアサポーター学生委員会の設立を行った。

キャリア・ピアサポーターを訓練し、「教員・職員と連携をしながら学生が学生を支援する」ことを使命とするピアサポーター学生委員会を結成する土台をつくりだすために、12月27日と28日に、「学生支援サミット2010:ともに創る～教職学生の三重奏～」をピアサポートルームで開催した。初日には、学生9名に加えて教員6名、職員5名が、アプリシエーティブ・インクワイアリーというファシリテーションの方法を用いて意見交換を行い、2日目には学生たちが「キャリア・ピアサポーター宣言」を作成した。

キャリア・ピアサポーターたちは、職員とも連携し、キャリア実践科目の学生たちによる運営のコーディネートを行い、会場準備、タイムテーブルの作成、必要備品の準備など、入念な打合せを重ねた。2月11日、三翠ホールを舞台にアカデミックフェアが行われ、200名が集った。午前中には、法則フェスタが小ホールで開催され、6つの発表が行われた。大ホールでは、キャリア実践科目の発表が4つ行われ、その後ポスターセッションの1分プレゼンテーションが行われた。正午からは、小ホールで大学紹介実践の受講生による三重大学紹介が6発表行われた。さらに、ホワイエでは、40のポスター発表が行われた。午後2時から、大ホールで、社会で活躍中の6名のパネリストを招いた「キャリアデザイン2011」が行われ、内容の濃いシンポジウムが展開した。

大きな会場であったにもかかわらず、学生と教職員が連携をしながら、スムーズに会の運営が進んだ。また、発表内容についても、分野やレベルが多様であったにもかかわらず、充実したアカデミックな交流が展開した。参加者数も、過去最大であった。

アカデミックフェア交流会は、17時半から小ホールで100名ほどの参加者を集めて行われた。交流会の冒頭には、ピアサポーター学生委員会発足記念式典が行われた。内田学長が「三重大学学生支援方針」を宣言し、学生たちに激励のことばを送った。その後、ピアサポーター学生員長(人文学部2年)が、「キャリア・ピアサポーター宣言」を行った。アカデミックプラザが目指していたアカデミックコミュニティの担い手としての学生が組織化された時であった。

4.4. アカデミックコミュニティの制度化

2011年度には、多様な活動が、共通教育、学部や研究科、HEDC、学生総合支援センターを横断的に展開し、教員、職員、学生相互の連携が図られた。

教職員研修としては、高等教育創造開発センターが中心となり、学生の「4つの力」を育成するためのFDが開催された。2011年9月に、教育の質保証に向けた「3つの方針の策定に向けて」という全学FDが開催され、外部から招へいた専門家による講演の後、各学部と共通教育における取組の検討を行った。10月には学生の省察システムであるeポートフォリオ、11月には教育評価、12月には入試フォローアップシステムに関する研修会が開催された。この中で、10月のFDは、学生にも開放された。

学生向けには、8月、11月、3月に、「キャリアデザイン実践講座」を行った。また、ピアサポーターやSA・TA研修のために、9月には「就業力を身につけるために今できること」というタイトルで外部講師を招いたキャリアアップ研修会を、3月には「TAマニュアルのデザイン」というタイトルで研修会を行った。この中で、9月のキャリアアップ研修会は教職員にも開放され、学生支援を行う上でのFDとしても開催された。ピアサポーターたちは、授業や研修会を通したスキルを生かして、4月、7月、10月に、学生向けに「なんでも相談フェア」等を開催した。

また、授業と連携して、さまざまな学習成果発表会や交流会が開催された。7月と2月には、PBLセミナー公開発表会が開催され、異なったクラスのPBLの学習成果の交流が行われた。共通教育では、新しい取組として、7月29日に「共通教育全体発表会」が開催され、その運営は「学習支援実践」の受講生とその授業のSAたちが担った。

キャリア実践等の授業には公開のイベントが組み込まれているものがある。2011年度開講された「留学生支援実践」では、学生総合支援センター主催の留学生と日本人の交流会の運営を委託され、留学生カフェを4回実施した。また、「美し国おこし三重実践」では、三重県とのプロジェクトを担う地域の方々と交流を「美し国おこしカフェ」という名称で4回行った。このように、教員が導きながらも、SAや学生たちが中心となった企画が、授業という制度を活用して展開した。

社会公開型のワークショップとして、7月16日に三翠ホールを会場として、「熟議2011in三重大学」が開催された。担当教員は、三重県および三重県教育委員会と連携し、運営委員会を組織し、広く参加者を募った。その結果、当日、三重大学の教職員や学生ばかりではなく、

行政、教育、企業、自営業、NPO 関係者、一般市民、他大学学生など、182 名の参加者があった。

第 6 回アカデミックフェアは、2 月 14 日、共通教育校舎 3 号館で開催された。教育担当理事(高等教育創造開発センター長)を大会委員長、教育担当副学長(共通教育センター長)を大会副委員長、学生総合支援担当副学長を実行委員長とする組織体制のもと、教員、職員、学生の協働による運営が行われた。

前年度のアカデミックフェアでは、「教育」と「地域との交流」という二つの目標を掲げたために、運営にかかわる学生や教職員に過度の負担がかかるとともに、労力に見合う効果を得ることができないとの反省があった。

「アカデミックフェア 2012」は、その教訓から、ターゲットを「教育」に絞り、会場を三翠ホールから共通教育校舎に移し、日程を土曜日から平日に、期間を 1 日から半日に変更することによって、イベント運営の負担を軽減した。一方で、発表に対して審査基準を明確にし、参加者からのコメントのフィードバックが十分に得られるようにするなど、教育効果を高める工夫がなされた。

アカデミックフェア当日には、名簿記載者だけで 249 名が会場を訪れた。参加者のうち、アカデミックフェアの参加が受講要件となっているキャリア実践科目の受講生が 163 名である。一方、三重大学以外からの名簿記載者は 9 名のみであった。平日開催ということもあり、学校関係者の参加はなかった。13 時から、ポスター会場で、28 発表の 1 分間プレゼンテーションが行われた後、2 時間にわたるポスターセッションが行われた。15 時より共通教育会場、専門教育会場、卒論発表会場の 3 会場に分かれて、それぞれ 5 つずつの発表と質疑が行われた。16:40 より、フィナーレとして表彰と講評が行われた。17 時半より、ピアサポーター学生委員会主催のアカデミックフェア交流会『和気会愛』が開催され、アカデミックフェア参加者の半数以上が残り、交流を深めた。

アカデミックフェアは、市民への開放性や平等性という特徴よりも教育的な色彩が強くなった。アカデミック大賞、ポスター大賞、審査員特別賞なども、参加者の投票を参考にしつつも、大学教員からなる審査員によって決定された。審査員を担当した教員からは、「スケジュール的にはコンパクトになりましたが、その分、行われた発表も質が高く、とても充実した会になったように思います。」「口頭発表については、審査員が審査するというスタイルは、学生による投票よりも審査の公平性・客観性が高くて良いと思われました。」などの意見が寄せられ、教育的な効果は高まったものと思われる。

このように、2011 年度には、学部や研究科とのパイプを強化しながら、HEDC、共通教育センター、学生総合支援センター、そして関連事務組織が、それぞれの活動を行っていく、アカデミックプラザが目指した学習コミュニティを生み出していった⁷⁾。

2011 年度末で就業力育成支援事業は打ち切られたが、アカデミックフェアは、学生総合支援センターを運営母体としながら、ピアサポーター学生委員会との連携のもと、恒常的な運営体制が整い、2012 年度以降も継続している。PBL の全学的推進、教育成果の公開を通じた授業間、および社会との交流の推進、正課と課外活動を結びつけ、教職員と学生とが協働して生み出されるアカデミックコミュニティの形成は、一応の完成を見たといえよう。『アカデミックプラザ活動報告書』は、2011 年度が最終巻となった⁸⁾。

5. 考察

5.1. アカデミックフェアの変化

法則フェスタやアカデミックフェアの変化について、法則フェスタとして開催されていた期間(第 1 期:2003～2005 年度)、アカデミックフェアとなった最初の 3 年(第 2 期:2006～2008 年度)、キャリア教育と結びつくようになった次の 3 年(第 3 期:2009～2011 年度)を比較して分析する。

参加者は、第 1 期および第 2 期には、120～150 名であったが、第 3 期、特にキャリア実践科目の発表の場として位置づけられた 2010 年度には 190 名、2011 年度には 249 名にまで増加した(図 5)。一方で、2003 年度には 28% を占めていた学外者は、第 2 期には 5～18%、第 3 期には 3～6%へと減少した。法則フェスタは、市民と一体となったイベントを意図していたが、次第に学内における学習成果発表の場としての性格が強くなっていった。

アカデミックフェアに対する評価は、概ね良好である(図 6)。特に、第 1 回法則フェスタ(2003 年度)では、アンケート回答者の 47%が魅力を「とても感じる」としており、大変好評であった。魅力を「とても感じる」の評価は、第 1 期には 28～47%、第 2 期に 19～33%と、第 3 期には 13～20%と次第に低下するが、これは、授業の単位取得要件に組み込まれて参加する学生たちが増加したことにも起因するものと思われる。「魅力を感じるから参加する」から「参加して魅力を発見する」に移行してきた様子がうかがえる。

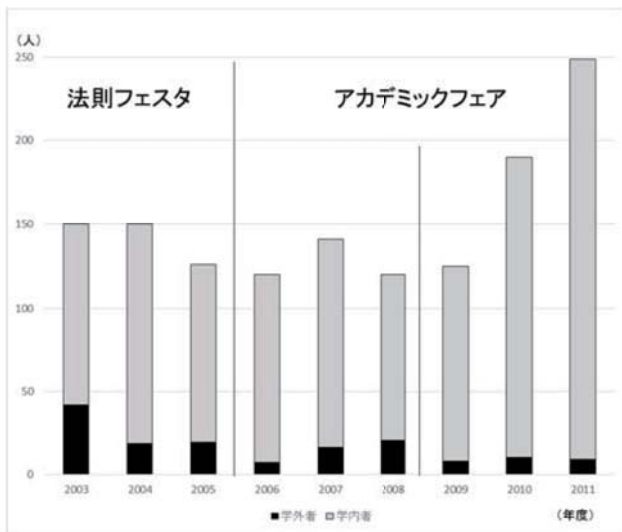


図5 アカデミックフェア参加者数の変化

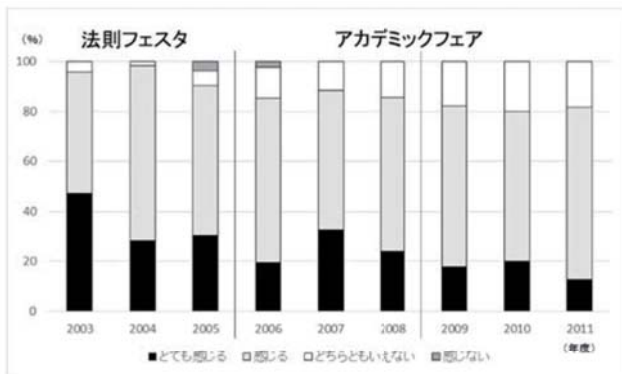


図6 アカデミックフェアに魅力を感じる参加者の割合

図7および図8は、アカデミックフェア参加者アンケートにおいて、イベントの「どこに魅力を感じますか」という問いに対して、複数回答で得た結果である。

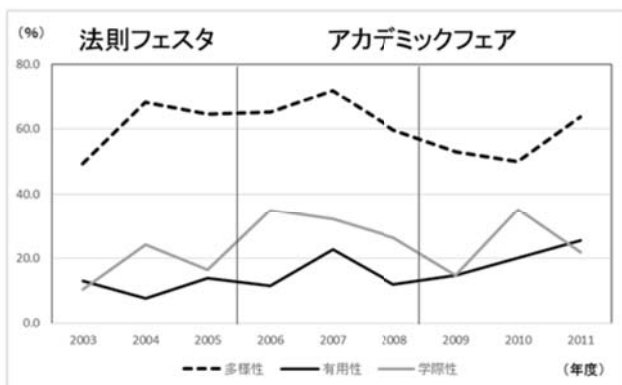


図7 アカデミックフェアの魅力(多様性・有用性・学際性)

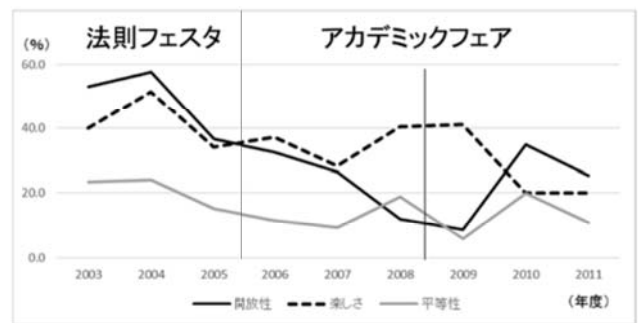


図8 アカデミックフェアの魅力(解放性・楽しさ・平等性)

どの期間を通して、一貫して高い評価を得ている項目は「テーマの多様性」であり、49～72%の回答者の支持を得ている。初年次教育成果から大学院や教員による専門的研究成果まで、文科系、理科系、実践系の分野を問わず同じ場で発表がなされていることは、このイベントの最も顕著な特色である。

第1期には評価が高かったが、第2期、第3期に低下してきた項目は「社会への開放性」、「楽しそうな点」、「参加者の平等性」である(図8)。イベントの軸足が、社会公開から教育へと移動するにつれて、学外者の参加が減少するとともに、開放性が低下した。また、平等性の低下は、教育効果を上げるうえで、教員の評価を加える方向に舵を切ったことの反映と思われる。たとえば、当初は法則大賞などの受賞者は、単純に参加者の投票で決定していたが、2011年度には大学教員による審査により決定することとなった。

一方で、評価が向上した項目は「学際性」と「有用性」(役立ちそうな点)である(図7)。法則フェスタにも専門的な発表があったが、身近で親しみやすいトピックが参加者に強烈な印象を与えていたが、アカデミックフェアに移行し、三重大学のPBLの内容が深化し、評価法が確立するにつれて、学術的な色彩が強まり、教育効果を狙った運営がなされるようになってきたことが、この評価の高まりに反映しているものと思われる。

5.2 アカデミックプラザの意義

法則研究プラザに関しては、地元メディアに取り上げられたこともあり、ある程度の認知度はあったが、関わる教員は人文学部や教育学部の一部に過ぎなかった。また、「アカデミックプラザ」は、認知度はほとんどないまま、唯一その名称が用いられている年次活動報告書は2011年度のものが最後となった。アカデミックフェアは全学的なイベントとして、一定の認知を得てはいるが、参加している教職員や学生は、限定的である。しかし、

アカデミックプラザの活動や理念は、三重大の教育改善に以下のように関与してきたと思われる。

(1)人文社会系学問をも含む全学PBL化

共通教育におけるPBLセミナー導入において、人文社会系教育においても全学PBL化の可能性を示したものが、法則研究プラザの研究実践であった。

(2)公開発表要素を含むPBL授業の定式化

PBLセミナー開講に向けての議論の過程で、公開の場での発表という要件が加えられ、以後、「4つのカスタートアップセミナー」やキャリア科目等においても学習成果発表が授業に組み込まれるようになった。

(3)学習成果発表の活性化

法則フェスタやアカデミックフェアに加えて、さまざまな運営母体による多様な学習成果発表会が行われるようになった。

(4)分野を超えた交流の活性化

学部を超えた学生や教職員の交流が生まれるようになった。運営にかかわる教員間では、教育交流が進展した。

(5)わかりやすい発表の指向性

市民をも交えた発表会の開催を通して、専門以外の人に対してわかりやすい発表を目指すようになった。アカデミックフェアでの学外者がわずかであっても、専門外の人にわかってもらえることを意識する環境が生み出された。

(6)学問への楽しみの要素の付加

法則フェスタで始まった「楽しい」という要素が、その後のアカデミックフェアやその他のイベントにも形を変えながら継続している。

(7)FD効果

発表会を通して、教員が他授業におけるPBL成果に触れる機会が増え、PBL授業の改善に関する実践的な示唆を得ることができるようになった。

(8)隠れたカリキュラムとしての機能

発表会を目指すことを通して、授業外の学習が増加し、またその運営や交流等を通して、授業を補完してコミュニケーション力や生きる力を養う隠れたカリキュラムとして機能した。

(9)自発的エネルギーの制度化

自発的な教員間のエネルギーによって始まった法則研究プラザが全学へ広がる過程で、実体を持った制度に結びついた。

(10)補助金事業と結びついた教育改善

アカデミックプラザと結びついた補助金申請として、却下されたものが2件あったが、選定委員からの指摘を通して、学内の教育体制の改善が進んだ。また、採択さ

れた就業力育成支援事業を通して、キャリア教育と学生支援体制が制度的に進展した。

(11)アカデミックコミュニティの創出

アカデミックプラザの活動やそれにかかわる補助金事業を通して、教員、職員、学生がともに、学生支援に関わりつつ、学習活動成果の交流を進めるアカデミックコミュニティが生まれた。

6. 結び

教育改革を行ううえで、大学のリーダーシップは不可欠ではあるが、それが「上からの一方的な押し付け」と受け止められるときに、内容は形骸化する。一方で、三重大においては、学長や教育担当理事のリーダーシップと内発的な改革の動きがともに働き、大きなうねりとなっていった点が、PBLの全学的推進をはじめとする教育改革のポイントとなった。第一期中期目標・中期計画が始まる以前に、すでにそれぞれの学部において、個々の教員やグループによって、主体的な教育改善の取組は行われていた。人文学部に生まれた法則研究プラザの動きは、その一つであった。

高等教育創造開発センター設置準備委員会が組織された時に、各学部ですでに教育改善を進めている教員が集められ、個々の知恵がPBL推進というテーマに向かって集約され、大きなエネルギーを生み出した。法則研究プラザの活動とその理念は、学部が中心となる小さな動きであったが、HEDCにおける交流を通して全学的なアカデミックプラザの活動と結びついた。そして、HEDCで推進されてきた教育開発、評価法の開発、Moodleの整備などが、共通教育を舞台にモデルケースを生み出しつつ、その成果がアカデミックフェアで公開されるという一連のサイクルを生み出した。三重大が申請する概算要求プロジェクトや補助金事業は、それ自体が改革を生み出したというよりも、事業を契機としながらも、すでに生み出されていた内発的エネルギーを具現化したものであったことが、実体を伴った教育改革に結びついたものと思われる。

本稿は、三重大における様々な教育改革の流れを、アカデミックプラザという視点から振り返ったものである。アカデミックプラザ自体は目立たない働きであったが、教育改善に携わる教員たちのエネルギーが発揮された一連の動きとしてとらえると、行政報告には現れない教育改革の秘訣の一端が浮かび上がってくる。他大学の先進事例から学ぶことと並行して、自らの大学にすでにある強みとエネルギーを発見し、それを集約してプロジェクトに具現化するという根気強い作業は、忘れてはな

らない改革プロセスの一要素となるであろう。

注

- 1) 三重大学高等教育創造開発センターは、三重大学の教育目標『「感じる力」「考える力」「生きる力」がみなぎり、地域に根ざし国際的にも活躍できる人材を育成する』の達成に向け、2005年4月に、教育開発部門、教育情報システム部門、教育評価部門、教育連携部門から成る4部門体制で学内共同教育研究施設として設置された。後に、入試広報部門、入学者選抜方法研究部門、全学教育部門、地域人材教育部門が増設されたが、2016年度に誕生した地域人材教育開発機構に発展的に統合された。
- 2) 『アカデミックプラザ活動報告書』は、三重大学高等教育創造開発センターウェブサイトの「HEDC 報告書」の中に、学内限定で公開されている(2017年2月12日)。
- 3) PBL セミナーの開講の5要件は、以下の通りである(高山 2007, p. 29)。
①広義ではなく、自主的・能動的・自己決定的学習を受講生に求める。
②1年生が多く受講することを念頭におき、身近に感じられる素材もしくはプロジェクトを提示する。
③問題または課題を発見・解決したり、プロジェクトを遂行したりする中で学習を進める。
④自己学習を重視し、グループワークを学習の中に取り入れる。
⑤学生による学習成果をセミナーの終盤に1回「公開の場」で発表する。
- 4) アカデミックプラザのHEDC教育連携部門への位置づけは、推進プロジェクトチームの話し合いを通して認められたものであり、2006年度～2010年度『アカデミックプラザ活動報告書』は、同部門の名前で発行されている。しかし、実際にはアカデミックプラザの名称が、規定等に示されたことはなく、活動の推進にはHEDCの部門にこだわることはなく、また共通教育センターや学生総合支援センター、人文学部や教育学部など、多様な教職員が関わっていた。就業力支援事業の取組の一部として位置づけられた2010年度より、学生総合支援センターに運営の重心が移り、2011年度活動報告書は、HEDCと学生総合支援センターが共同編集として記載されている。
- 5) アカデミックフェアが生まれた2006年度に、ただちに法則フェスタが消滅したわけではなく、アカデミックフェアの中の口頭発表部門として組み込まれた。2007年度には、カフェの代表発表会が「カフェグランプリ」と称されるようになり、法則フェスタの名称が消滅した。
- 6) 4つのカスタートアップセミナーは、毎年クラス内での発表を公開しているが、2010年度にのみ、クラス内

発表に加えて、一斉の発表会を設けた。

- 7) 「アカデミックフェアの参加者が限定的である」という批判は発足当初よりあった。その対策として、授業と関連付けて参加者増加を図ったり、大学院や教育学研究科の内地研修生への参加を促したりするなど、様々な努力が重ねられ、その成果は現れた。一方で、発表者数が増えすぎることにより、運営の負担が増えることや、強制参加を促すことによる意欲の低下の影響を避けるために、規模を大きくすることには慎重であるべきであるとの意見もあった。学習成果のプレゼンテーションの機会が増加してきた状況を鑑みて、2012年度以降は規模拡大よりも、発表者の意欲と発表内容の質を確保しつつ、継続することに強調点が置かれることになった。
- 8) 『アカデミックプラザ活動報告書』が2012年度以降発行されなくなったことは、活動内容が消滅したということではなく、それぞれの活動が、HEDC、学生総合支援センター、共通教育センターの活動に組み込まれ、制度化されたことを意味する。学生総合支援センターでは、『三重大学学生総合支援センター報告書』が、2012年度より毎年発行されるようになり、キャリア教育やピアサポーター、SA活動などの報告が制度的に行われるようになった。

参考文献

- 奥村晴彦(2007)「三重大学 Moodle の構築と運用」『薬学図書館』52(3): 254-257.
- 教育再生実行会議(2013)『これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)』(http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3_1.pdf)(2017年2月12日)
- 高山進(2007)「PBL(Problem-based Learning)セミナー初年次の実施について」三重大学共通教育センター『大学教育研究』15号, 27-33.
- 中央教育審議会大学分科会(2014)『大学のガバナンス改革の推進について(審議まとめ)』(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1344348.htm)(2017年2月12日)
- 中川正(2000)『文化の法則を探ろう』三重大学出版会。
- 中川正(2015)「学生支援を組み込んだカリキュラムの構築—三重大学における教育質保証の試み—」『名古屋高等教育研究』15, 23-38.
- 中島誠・長濱文与・中山留美子(2011)「4つの力」スタートアップセミナー受講生は教育目標をどのように理解したか—テキストデータの分析を用いた質的検討—三重大学共通教育センター『大学教育研究』19,

55-61.

中嶋嶺雄(2010)『なぜ、国際教養大学で人材は育つのか』
祥伝社.

中嶋嶺雄(2012)『学歴革命－国際教養大学の挑戦－』KK
ベストセラーズ.

中山留美子・長濱文与・中島誠・中西良文・南学(2010)
「大学教育目標の達成を目指す全学的初年次教育の
導入」『京都大学高等教育研究』16, 37-48.

日向野幹也(2013)『大学教育アントレプレナーシップー
新時代のリーダーシップの涵養ー』ナカニシヤ出版.

法則研究プラザ編(2007)『法則探検に出かけよう』三重
大学出版会.

SUMMARY

The history of the Mie University Academic Plaza is reviewed as one of the keys to improve higher education through learning result exhibitions in such stages as Academic Cafes and Academic Fairs. The movement started in the Faculty of Humanities and Social Sciences in 2003 when they established the Plaza for Social Laws Inquiry. It became the Mie University Academic Plaza, organized by the Education Network Division of the Higher Education Development Center in 2006. The activities have contributed not only to improve communications among different academic fields of different levels, but also to transform education institutions through fund-supported projects related to the Academic Plaza.

KEYWORDS: Higher Education Reform, Academic Plaza, Academic Fair, The Plaza for Social Laws Inquiry, Problem-based Learning, Learning Result Exhibition.

† Tadashi Nakagawa*: The history of the Mie University Academic Plaza as an element of higher education reform.

* Faculty of Humanities, Law and Economics, Mie University
1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan